

# 箱屋の女房

雑記（戦後から令和へ）

中井由榮

昭和十八年（一九四三）の戦争中に生まれた私は、大阪で生まれ育ち、意地っ張りな女の子がおばさんになって、ふと歩んできた人生を振り返った時、戦後の物不足の時でも下町の暮らしを嘆くことなく、淡々と肩を寄せ合い笑顔で歩んできた子供のころを懐かしく思い出しています。

暮らしの様々な事象と生活様式の大きな変化を感じている今を記録したいと考え「あしたづ」に寄稿いたしました。

昭和二十年（一九四五）の大阪大空襲で家を焼失し家族で生駒市壱分に疎開、間もなく母が感染症の肺結核を患い二歳の私を残して他界した。兵役から帰った父は敗戦と連れ合いをなくした悔しさが幼子ながらに感じることはありませんでした。

戦後、父の仕事場は大阪市西成区北津守にあり毎日、壱部駅から王寺線で生駒駅まで乗り、近鉄奈良線に乗り換え上六駅で下車、堺方面に向かう市電に乗った



記憶が蘇えます。

しばらくして、仕事場の長屋を整備して狭い長屋住まいでしたが、家族全員が住むことができた。

下町の長屋の暮らしは、父が桶屋を営み出来上がった桶などを配達に行かされました。身長があまり大きくなかった私は盥（たらい）などの配達は、肩からくろぶしあたりまでであり、隣町まで歩いていくのがとても厄介でありました。

水道も共同水道の為、水汲みをして台所に運ぶと大きな水瓶があり、いつもいっぱい水をためて生活用水として使っていた。どこかの家も同じ水瓶があり、今では見かけなくなったあの水瓶はどこに行ったのでしょうか？

ご飯も家族が多かったのでお釜に一升五合のお米をとき、へっついさん（竈）でご飯を炊くのが子供の仕事でした。玄関先では「かんでき」（七輪）にコークスをくべて、夕飯の手伝いをした。

子供の頃の遊びは、縄跳び、石けり、かくれんぼと、入りくんだ長屋はどこでも隠れられ夕方には各家庭から大声で「ご飯やではよ帰りや！」と、とても賑やかな夕暮れ時の長屋の日常風景でありました。

又、夕飯が過ぎた八時頃になると毎日のように停電がありアルコールランプに明かりを灯し家族が寄り添って暮らしていたのを思い出す。【ランプの煤の掃除は

子供の手が細い私の仕事でもあった。】（昭和二〇年代）

我が家の収入は父の桶屋の仕事しかなく、時代は利便性に富んだプラスチックの台所用品に代わり桶屋の仕事が年々少なくなり、生活が困窮していきました。

幸いなことに兄や姉が働きだし、そして私が就職する昭和三十二年ごろ、やっと生活にゆとりができました。

テレビ、洗濯機、冷蔵庫と我が家に近代化が始まった。長屋のライフラインも整い長屋の各家庭に、ガスや水道が整備され、快適な暮らしが始まりました。

昭和三十二年（一九五七）頃は、全国的に就職率が高く、各地方から『金の卵』と揶揄されるほど、各企業が働き手を求めている高度成長期の真っただ中に入った時代でした。

私の仕事先は、記念メダルや徽章などを製作している工芸会社で、大きな機械が並んでいました。

仕事の内容は仕上げの仕事と、ラッピングを教えていただき、水引きの結び方から、銀杯を入れる桐箱の紐の結び方など、高価な物の包装も手掛けておりました。また、この時代は主に、紙箱や紙袋などが主流で、小さなバッジなどは、紙の小袋に詰めて出荷した。

入社して間もなく、とても大きな仕事に出会った。

昭和三十九年（一九六四）日本で初めてのオリンピックが開催され、各国の選手が胸につけて入場行進する徽章の仕事に関われたこと、今もあの時の誇らしい気持ちたちが背中をピンと伸ばしてくれます。

オリンピック開催は、日本の高度成長に拍車をかけ都市部の道路整備と、夢の『超特急・新幹線』が東京―

大阪間を走り、日本中が歓喜した時代でもあった。

仕事も順調に、それなりのポジションにつき、工場  
の仲間とも楽しく仕事をしていたが、二十五歳を過ぎ  
たころから結婚話がありました。仕事も順調であつ  
た為、このままでもよいかとも考えていた折、勤めて  
いた会社の人から結婚話を、勧められお見合いをする  
ことになりました。

お見合いの相手をあまり詳しく知らないまま、お会  
いしましたが、両親を大切にしていることなどから、  
結婚相手としてお付き合いして昭和四十五年（一九七  
〇）に結婚いたしました。

結婚相手の主人  
は、大阪上本町二  
丁目で箱屋（上用  
饅頭用箱・菓子  
箱・郡山お城の口  
餅の箱など）の家  
業を生業とした両  
親に育てられ、四  
人兄弟の長男とし  
て子供時代を過ご  
し、大阪の「ぼん  
ぼん」と大事に育  
てられた様です。



中学生の頃の主人は、玉造から上町台地上がる坂  
道は、東雲町あたりが特に急な坂道で紙を運ぶ自転車  
や、リヤカーなどの後ろを押して手伝ったと、大阪市内  
を車で走る時々に、思い出して話してくれます。

高校に入学した時には、家業の手形決済のトラブル

で、箱屋は倒産し、家財一式をなくして、高校も退学、  
ずいぶん苦労をしたそうです。

彼と結婚した時は、すでに箱屋の家業ではありませ  
んでしたが、紙業関連の職業に就き、酒の一升瓶を入れ  
る化粧箱などをつくる大きな機械（トムソン）を稼働さ  
せる仕事をしていました。

結婚を機に東大阪市で生活を始め、一男一女に恵ま  
れ、令和二年（二〇二〇）、二人揃って元気に金婚式を  
迎えることができました。

最近では、和本を入れる箱帙などを作る機会が多く  
なった事に気付き、元箱屋を生業としていた主人に材  
料等の調達など相談する機会がずいぶん増えました。

その、和製本の教室に出会うきっかけは、父の「俳  
句集」が手元にあり、いつか一冊の本を作りたいと願  
っていた時に、綴じ方を教えていただけ「もんじ文  
化愛好会」に出会うことができました。

このサークルの会は、河内の郷土文化サークルセン  
ターに加盟し、大阪商業大学商業史博物館内に拠点を  
置き、郷土河内を探索するメンバーで構成された素晴  
らしい研究会でした。

日本の消えゆく和綴じ本の技術を少しでも残したい  
と熱心に学ばせていただき、今は「もんじ文化愛好  
会」の代表者として勉強を重ねているところです。

現在、筆者の私は、石切参道で令和元年十二月に  
「一般社団法人河内木綿はたおり工房」を運営、河内  
木綿の伝承技術を後世に残せるよう切磋琢磨している

ところです。

河内木綿を入れる贈答品用の手作り箱を別注にてご  
注文を頂くことがあり、箱屋の家業を手伝う機会はな  
かったが、箱を作ることに従事することの不思議な縁  
を感じ、紙業関係や、印刷関係に詳しい主人の心強い  
味方を得て、何かと世話をかけていることに感謝して  
いる。

（もんじ文化愛好会）

